

## 『とはずがたり』 信濃善光寺参詣記事について

須田 亮子

### はじめに

『とはずがたり』巻四には正応二年（一二八九）、出家した主人公二条が京から鎌倉へ下向し、さらに信濃善光寺（以下「善光寺」）を参詣する様子が書かれている。鎌倉に到着した主人公二条は善光寺へ旅立つ予定であったが、「善光寺の先達に頼みたる人」が病床にあつたので一旦は断念し、翌正応三年（一二九〇）二月、参詣を果たす。善光寺参詣を果たしたことで、主人公二条の足は鎌倉から京へと向けられる。

巻四、五に載る旅は、作者二条が実際に体験したことを下に書いたと考えている。善光寺参詣記事については、実際に参詣していないのではないかとする説もあるが、作者二条が実際に同寺に参詣したからこそ、作品に組み込むことができたと考えた<sup>(1)</sup>。

本論文ではまず、作者二条が善光寺に実際に参詣したことを下地に書いていると述べるために、これまで詳細に検討されてこなかった信濃国と作者二条の関わりについて考察し、彼女が同寺に参詣できる環境にあつたことを明らかにしたい。

その上で、彼女の参詣した当時の同寺についても考察し、作品内におけるその効果を明確にしていく。

なお作者が作品中で自分自身をどのように表現しているのかを見極めるために、作品に出てくる二条を「主人公二条」、作者として作品を組み立てている二条を「作者二条」と書いて区別する。

## 一 信濃国と作者二条の関わり

### 1 信濃国と四条家・村上源氏

信濃国と作者二条との関わりを探るにあたり、信濃国の役職に母方の四条家と父方の村上源氏が就任していることを確認したい。

四条家については隆房の子息である隆衡が建保元年（一二二二）には知行国主となり、『明月記』建保元年閏九月十七日条）、その後、隆仲が寛喜元年（一二二九）まで信濃知行国主であった（『明月記』寛喜元年十二月二八日条）。その兄弟には園城寺長吏となった隆弁僧正がおり、彼は鶴岡八幡宮別当であった文永八年（一二二七）十月十九日、善光寺堂供養のために導師として下っている（『鶴岡社務記録』〈続史料大成〉文永八年十月十日条、『鶴岡八幡宮寺社務職次第』〈群書類従〉）。以上のように四条家は特に作者二条の曾祖父の世代に信濃国と関係が深かったようである。

村上源氏では源雅親が寛喜三年（一二三二）には知行国主となっており（『民経記』〈大日本古記録〉寛喜三年四月十四日条）、中院通教が建長七年（一二五五）信濃介に（『公卿補任』〈新訂増補国史大系〉文永四年）、文応元年（一二六〇）三月二十九日には中院通頼が信濃権守に（『公卿補任』文応元年）、堀川具守が信濃介に補されている（『公卿補任』文永四年）。さらに文永九年（一二七二）には久我通雄が信濃権介に（『公卿補任』文永十一年）、永仁二年（一二九四）には久我長通が信濃介となっている（『公卿補任』永仁五年）。また『久我家文書』（国学院大学久我家文書編集委員会編）には、「明德

『とはずがたり』信濃善光寺参詣記事について

三年（一三九二）信濃知行国主右大臣久我具通」との記述が見られ、時代は下がっているが、信濃国と久我家との関係の深さを示す資料と考えられる。<sup>②</sup>さらに延文年間（一三五六〜一三六〇）の奥書を有する『諏訪大明神絵詞』（続群書類従）には、「久我内大臣家筆」「六条中納言家筆」の文言が見られ、村上源氏がその作成に携わっていたことを示しており、こゝでも信濃国と村上源氏との関係を垣間見ることが出来る。

## 2 信濃国と果圓（平頼綱）

作品の中で主人公二条が接した人物との関連から、信濃国と作者二条との関係についてみていくこととする。先に掲げた『諏訪大明神絵詞』（続群書類従）には次のような話がある。なお、括弧内は本文の割注である。

正応の比。当国御家人小諸太郎と云物。当社頭役の時。下部下女隣国上州に越て朝の市をすぎけるに。関東の執権貞時朝臣の管領したる果圓（平左衛門入道と号す。当国守護代）従人等。牛を飼て下女におひかけたりける程に。口論を仕出して。打擲刃傷に及びけるが。権勢にはこりて。頓て彼下人を誅せんとする所に。忽眼暗なりて。犯人の首を打はづす事兩度なり。剩太刀を土に打ち立て三つに折たり。実に本地千手観音にておはしませば。尋段々壞の御誓も思合て貴し。

正応年間に執権北条時宗・貞時の内管領であった果圓（平頼綱）の「従人」らが上野国において信濃国御家人小諸太郎と口論になり、さらに斬りかかろうとした時、太郎に千手観音の加護があり、斬りつけることができなかつたという話である。果圓（平頼綱）は北条貞時執権就任以後、内管領となった人物である。その専制ぶりは『実躬卿記』『保暦間記』などで知ることが出来る。<sup>③</sup>また当該記事の後には、鎌倉における裁断の折の神威をも恐れぬ果圓の様子が記されており、その驕慢な態度を読み取ることもできる。注目したいのは果圓が信濃国の守護代であつたという傍線部である。この記述

は割注であるため、後代に差し込まれた可能性も考えられるが、管見の限り当該記事以外では見出せていない<sup>(4)</sup>。この果圓に主人公二条は鎌倉で会っていた。

御方とかや出でたり。地は薄青に、紫の濃き薄き糸にて紅葉を大きな木に織り浮かしたる唐織物の二衣に、白き裳を着たり。みめ、ことがら誇らかに、丈高く大きなり。かくいみじと見ゆるほどに、入道あなたより走り来て、袖短なる白き直垂姿にて、馴れがほに添ひ居たりしぞ、やつるる心地しはべりし<sup>(5)</sup>。

(巻四)

鎌倉到着以後、連絡を取り合っていた小町殿からの要請により、主人公二条は「入道」(果圓)の邸へ赴く。そこで、東二条院から入道の奥方に下賜された五衣を調えることとなる。その邸内において主人公二条は、大柄で堂々とした御方に寄り添う「袖短なる白き直垂姿」の果圓について見劣りする印象を受けている。また彼の子息飯沼判官資宗とは、続歌を通して親交があったことも記していた。

飯沼の新左衛門は、歌をも詠み、数寄者といふ名ありしゆるにや、若林の二郎左衛門といふ者を使にて、たびたび呼びて、続歌などすべきよし、ねんごろに申ししかば、まかりたりしかば、思ひしよりも情けあるさまにて、たびたび寄り合ひて、連歌、歌など詠みて遊びはべりしほどに、師走になりて、川越の入道と申す者の跡なる尼の、「武蔵国に川口といふ所へ下る。あれより年返らば、善光寺へ参るべし」と言ふも、便りうれしき心地して、まかりしかば、雪降り積もりて、分けゆく道も見えぬに、鎌倉より二日にまかり着きぬ。

(巻四)

「飯沼の新左衛門」とは資宗のことである。『勘仲記』(増補史料大成)正応二年(一二八九)十月三日条に「関東飯沼平判官(助宗)」の名前が見られ、また同月七日条にある「飯沼判官叙爵の後」から、この頃叙爵していたことが分かる。その資宗が「若林の二郎左衛門」を仲介役にして、主人公二条を続歌に「ねんごろに」誘ってきたので、彼女は仕方なく参加する。

『とはずがたり』信濃善光寺参詣記事について

前述の果圓やこの資宗についての記述には、主人公二条が彼らを軽んじている態度が見られる。そこに都人としての彼女の気質を窺うこともできるが、当時の鎌倉における権力者たちとの親交を不承不承にもしなければならなかったということを読み取ることができる。この表現は彼らに世話にならなければならなかった彼女の立場を示しているといえよう。資宗との続歌直後、「川越の入道と申す者の跡なる尼」を頼って川口に下り、そこから善光寺へ参詣する段取りができることとなる<sup>6</sup>。また、鎌倉を旅立って約九ヶ月経った善光寺参詣後の鎌倉滞在記事も、資宗との続歌になっている。参詣前後の記事を資宗との続歌にしていることから、作品には記されない作者二条の実際の旅における、切れることのない親交を読み取ることができる。善光寺参詣前後の鎌倉での記事は、飯沼資宗の父果圓が信濃国の守護代であったこと<sup>7</sup>によって、作者二条の善光寺参詣が可能になったことを示唆している。

以上、四条家、村上源氏がともに信濃国の知行国主、または信濃国の国司に就任していることから、作者二条にも少なからず信濃国と関係があったことを述べ、また、『諏訪大明神絵詞』が「果圓」（平頼綱）を「当国守護代」と記していることから、主人公二条が鎌倉で知遇のあった頼綱父子の関与も考えられることを述べた。作者二条の参詣当時、特別な領地的関係が明確に分からなくとも、彼女の出自と作品に記された主人公二条の交友関係から、作者二条は信濃国に縁故関係があったと考えられる。その縁故関係があった信濃国の善光寺に作者二条は参詣しており、そのことを下地として作品を書いたと考える。

## 二 鎌倉時代の善光寺参詣とその信仰

では作者二条が参詣した当時の善光寺の様子はどのようなものであったのだろうか。治承三年（一一七九）三月の炎上以降、再建の過程を追いながら当時の参詣の様子、その信仰について考察していくこととする<sup>8</sup>。

延慶本『平家物語』は治承三年（一一七九）三月廿四日の炎上を伝えており、この時が同寺炎上の初例であったとする<sup>8</sup>。信濃国知行国主であった源頼朝は、文治三年（一一八七）七月二七日、信濃国日代、同国御家人等に対して善光寺の再興を命じ、建久二年（一一九一）十月二二日には新造された善光寺金堂の供養が行われている（『吾妻鏡』〈新訂増補国史大系〉）。この新造された善光寺に頼朝は参詣を予定していたが（『吾妻鏡』建久六年〈一一九五〉八月二日条）、天候不良のため延期する（『吾妻鏡』同年八月二三日条）。『吾妻鏡』では建久七年の記事を欠くので頼朝が参詣したかどうかは不明であるが、彼の参詣を伝える資料は多い<sup>9</sup>。北条政子も参詣の意志はあったものの、叶わなかったことが『信生法師日記』に記されている<sup>10</sup>。また実際に参詣はしていなくても、北条泰時は田畑を不断念仏の料所として信濃善光寺に寄付している（『吾妻鏡』延応元年〈一二三九〉七月十五日条）、北条時頼も信濃国深田郷を買い、善光寺に寄付している（『吾妻鏡』弘長三年〈一二六三〉三月十七日条）。頼朝の善光寺信仰は、比企能員誅死の後をうけて信濃国の守護職を務めた北条氏に引き継がれていく。

またこの時期には、女性が善光寺を目指している。前述した北条政子以外にも、虎御前や千手前の参詣が知られる。

曾我十郎祐成の妾虎御前は建久四年（一一九三）六月十八日、十九歳で亡夫の三七日仏事を箱根山別当行実坊で済ませた後、出家を遂げ、善光寺へ赴いている（『吾妻鏡』。真名本『曾我物語』卷十（東洋文庫）では出家の後、十郎と弟の五郎時宗の白骨を首にかけ、善光寺へ赴いて、曼荼羅堂に収め、その後曾我において六四才（仮名本では七十才）で大往生を遂げたとする。四十余年の勤行によって往生を遂げたことを「末代なりといへども、女人往生の手本ここにあり。まことに貴かりし事どもなり」と讃えている。

千手前は『吾妻鏡』によると「官女」（元暦元年〈一一八四〉四月二十日条）、「御台所（北条政子）の御方の女房」（文治四年〈一一八八〉四月二二日条）とされ、元暦元年四月二十日、囚人となっていた平重衝を慰める役として登場し、重

『とはずがたり』信濃善光寺参詣記事について

衡と別れた後、恋慕の思いのため文治四年四月二五日に卒去する。しかし覚一本『平家物語』巻十「千手前」（日本古典文学大系）は「手ごしの長者がむすめ」と記して手越宿の遊女とし、重衡の死を聞いた後、その悲しみのために出家して善光寺を参詣し、彼の後生菩提を弔い、自身も往生を果たすことができたとする。覚一本に載るこの話は虚構とされ、そこに善光寺聖の関与が指摘されているが、善光寺が愛人と死別してその往生を祈念し、女性自身も往生を遂げることができるとして認識されていたことは言えよう。

善光寺聖による女人救済譚の増補は『善光寺縁起』（続群書類従）にも見られる。応安三年（一三七〇）から応永三四年（一四二七）の間に成立したとされる『善光寺縁起』に如是姫や皇極女帝が如来に救済された話が載り、この話は鎌倉期に付会されたものと考えられている。<sup>12</sup>『沙石集』巻七「妄執ニヨリテ女蛇ト成ル事」（日本古典文学大系）には、鎌倉に住む娘が恋の病によって死に、その遺骨を父母が善光寺に納める話もある。近世には多くの女性グループが善光寺参詣をした記録が残っているが、その興りは鎌倉期に見られ、女性が女人救済・女人往生を説く善光寺に憧れる下地が出来ていた。<sup>13</sup>

鎌倉時代は信濃国知行国主の源頼朝による善光寺再建をはじめとして、幕府内で善光寺が重んじられていた。この傾向は頼朝の死後も信濃国守護職に就いた北条氏によって受け継がれていく。一方で善光寺の女人信仰も形作られてもおり、女性が往生できるという善光寺への憧れを作者二条も自然と募らせていったことであろう。鎌倉に滞在していた作者二条は、善光寺の影響を多大に受ける環境に身を置いており、その影響は作品にも投影されていると考える。

### 三 善光寺参詣記事の効果

はじめに述べたように、主人公二条は鎌倉到着後の正応二年（一二八九）三月頃、「善光寺の先達に頼みたる人」の病

により、善光寺参詣を一旦は断念しなければならなかった。参詣への思いを絶やさず持ち続けて、ようやく果たすことができたのは、翌正応三年（一二九〇）二月である。善光寺到着後の記述に「宿願の心ざしありて、しばし籠るべきよしを言ひつつ、帰さには留まりぬ」とあり、この「宿願」は主人公二条の念願の参詣であることを意味している。主人公二条が鎌倉滞在中も参詣の意志を持ち続けることができたとする記述は、前述したような当時の鎌倉における同寺参詣の盛況ぶりが、作者二条によって投影された結果であろう。

所のさまは、眺望などはなけれども、生身の如来と聞きまゐらすれば、頼もしくおぼえて、百万遍の念仏など申して明かし暮す

（巻四）

主人公二条にとって善光寺参詣の目的は、右の記述から「生身の如来」であつたことが分かる。「所のさまは、眺望などはなけれども」の記述は単に実景を言っているのではなく、彼女の目的が周囲の風景が目に入らないほどに「生身の如来」、ただ一点に向けられていたということである。<sup>16</sup>善光寺本尊の一光三尊阿弥陀如来像は欽明天皇十三年、百濟聖明王から贈られた本朝最初の霊像である。阿弥陀如来像が実際に生きていくという意味で生身如来と称された。その文献上の初例は『水鏡』（新訂増補国史大系）欽明天皇条とされるが、如来が実際に生きていくという記述は、覚一本『平家物語』（日本古典文学大系）に見られる。

信濃国の住人おうみの本太善光と云者、都へのぼりたりけるが、彼如来に逢奉りたりけるに、やがていざなひまいらせて、ひるは善光、如来ををい奉り、夜は善光、如来におはれたてまつて、信濃国へ下り

（巻二）

都から信濃国への道中、昼は本多善光が如来を背負つて歩き、夜は如来が善光を背負つて歩いている。<sup>17</sup>生身如来の話は広く普及し、善光寺信仰の中心をなしており、祈念することによって現世利益が得られると信じられてきた。<sup>18</sup>主人公二条はかつて父雅忠の後生が極楽であるよう祈誓した折、八幡神から「今生の果報に代ゆる」という託宣を受けており、現世

『とはすがたり』信濃善光寺参詣記事について



における望みを絶たれていた。その彼女が生身如来を目指すことは筋が通っている。

この後、主人公二条は武蔵野から鎌倉に戻り、さらに帰京して後深草院と再会することになる。巻四冒頭から川口での越年まで主人公二条は紀行文の類型的表現ともとれるが、何かにつけ京での宮廷生活に思いを馳せていた。しかし、善光寺参詣記事以後、石清水八幡宮での後深草院との再会まで宮廷生活を懐かしむ記述は見当たらない。主人公二条にとって過去の宮廷生活（主に後深草院）は追懐すべきことがらではなく、現実に向き合わねばならないこととして捉え直されている。それ故に主人公二条は、石清水八幡宮、伏見御所で後深草院と再会することができたのである。善光寺に参詣し、生身如来に祈願することによって、過去と正面から向き合い、宮廷に立ち返る将来へ向けての前向きな精神を獲得したと読み解くことができる。<sup>19</sup> 信濃善光寺参詣記事を境にした主人公二条の精神的な変化は、作者二条が実際に参詣を果たし、現世利益と女人救済、女人往生を実感したからこそ、その作品内での効果を明確にすることができたと考える。

## おわりに

『とはずがたり』の広範囲に及ぶ旅は作者二条の実際の体験を下地にした記述であると考えている。善光寺についても信濃国と作者二条の縁故関係、交友関係を中心に考察した結果、その可能性が高いことが言える。

縁故関係については信濃国の知行国主を務めた作者二条の母方の四条家、国司を務めた父方の村上源氏は信濃国と深いつながりがあったと見られる。中でも後に久我家が信濃国の知行国主となっていることは、それ以前の関係をも推測させる。

交友関係については『諏訪大明神絵詞』に「果圓」（平頼綱）が「当国守護代」であったと記していることがあげられる。鎌倉においてその子息飯沼判官資宗と親交のあった作者二条が影響を受けて、その庇護の下、信濃国へ赴いたとも言えよ

う。それは作品として記す際に善光寺参詣の前後の記事を資宗との続歌としたことにもつながる。つまり、作者二条には信濃国へ旅立てる条件が彼女の縁故関係と交友関係から確認できるのである。

作者二条が信濃善光寺に実際に参詣したということ的前提に考えると、次に問題になるのはその彼女が信濃善光寺参詣を作品に組み込んだ理由である。善光寺参詣とその信仰は鎌倉において、その場所柄、盛り上がりを見せていた。特に中世以降は、女性の参詣が特徴的であった。女人救済・女人往生を説く善光寺は、女性の憧れであったと言えよう。また生身如来として現世利益を約束する同寺は、現世における望みが絶たれた主人公二条にとって魅力的な場所であった。主人公二条は善光寺に参詣することによって、強く前向きな気持ちを持つことができた。これは実際に作者二条が善光寺に感化された結果である。

以上述べてきたように、作者二条は現世利益と女人救済・女人往生を説く善光寺を実際に参詣し、そのことを下地にして主人公二条の善光寺参詣の様子を書いていると考える。作品に善光寺参詣を持ち込むことによって主人公二条は自信を得て、この後、京に戻ることができ、後深草院との再会をも果たすことができるようになるのである。『とはすがたり』における信濃善光寺参詣は、主人公二条の一つの転換点として効果があった。

## 注

- (1) 作者二条が参詣したのは川口善光寺であるという説がある。小口倫司氏「二条の善光寺参詣について」『駒沢国文』第三号 一九六四年五月) によって出された後、富倉徳次郎『とはすがたり』(筑摩書房 一九六六年四月 巻四「補注」)、水原一「とはすがたり」を読む―追憶とその形象、及び想念の屈折について―(『文学』第三五巻第一号 一九六七年一月) などによって小口論文をほぼ受け継ぐ形で述べられていく。小口氏はさらに「再び「善光寺参詣について」研究の経過とその私見」(『長野』第六四号 一九七五年十一月)、『とはすがたりの周辺』(銀河書房 一九八六年三月)の中で善光寺参詣を強く否定しておられ

『とはすがたり』信濃善光寺参詣記事について

る。また、鎌倉以遠の東国への旅を虚構であるとする説も、守屋省吾氏「とはずがたり」における事実と虚構」（『日本文学』第十六号 一九六六年六月）にある。一方で次田香澄氏の「とはずがたり構想論」（『文学』一九六七年一月）をはじめ、外村久江・外村南都子両氏の「早歌善光寺修行と参詣の旅（下）」（『金澤文庫研究』一五七号 一九六九年五月）などでは川口善光寺参詣説を否定され、最近の研究でもほぼ信濃善光寺参詣説に傾いている。本論文も信濃善光寺参詣説の立場に立ち、その論を成り立たせるように進めていく。

(2) 当該資料については夙に金井清光氏が「善光寺聖とその語り物」の中で指摘されている（『時衆文芸研究』風間書房 一九六七年十一月）。また小林計一郎氏は、信濃の国衙がのちに久我家領となつてのことから、久我家が信濃国衙と関係が深かつたことを指摘された（『善光寺史研究』第一章 善光寺略史 五 鎌倉時代の参詣と女人信仰〈信濃毎日新聞社 二〇〇〇年五月〉）。夙に指摘があるが、平頼綱の専制ぶりは『実躬卿記』（大日本古記録）正応六年（一二九三）四月二六日条の「諸人、恐懼の外、他事無」という記述に見られる。また『保暦間記』（群書類従）にも弘安八年（一二八五）十一月十七日の霜月騒動後についての「其後平左衛門入道頼綱法師（法名果圓）今ハ諍方モ無テ。一人シテ天下ノ事ヲ法リケリ」という記述がある。

(4) 細川重男氏は守護代が鎌倉に在住していた例として『諏訪大明神絵詞』（続群書類従）に載る果圓をあげ、資料を総合した結果の系図として、平頼綱の項目に「信濃守護代」を付け加えておられる（『鎌倉政権要職就任者関係諸系図 長崎系図②』（吉川弘文館 二〇〇〇年一月）。佐藤進一氏は「当国」を「上野国」と解釈しておられる（『増訂鎌倉幕府守護制度の研究 諸国守護沿革考証編』第三章東山道 上野〈東京大学出版会 一九七一年六月〉）が、本論文では細川氏に従い、「信濃国」と考えて進める。

(5) 本論文での『とはずがたり』本文の引用はすべて久保田淳校注・訳『建礼門院右京大夫集 とはずがたり』（新編日本古典文学全集 一九九九年十二月）に拠る。

(6) 諸注で「川越の入道」は『吾妻鏡』文永三年（一二六六）七月四日条に見える河越（平）遠江権守経重ではないかとされている。牛山佳幸氏は「鎌倉・南北朝期の新善光寺（上）」（『寺院史研究』第六号 二〇〇二年一月）の中で、川口善光寺の檀那は不明

であるが、二条を招いた女性が河越経重の後家の尼と考えられていることから、「同氏を川口新善光寺の外護者とみることもあながち否定できないように思われる」とされ、河越氏と川口との関係を示唆された。

(7) 善光寺史についてはすでに詳細な先行研究がある。本論文では特に次にあげる先行研究に拠った。小林計一郎「善光寺と女性

参詣―長野市箱清水―」(『社会と伝承』第六卷第三号 一九六二年十月)、金井清光「善光寺聖とその語り物」(『時衆文芸研究』風間書房 一九六七年十一月)、坂井衡平『善光寺史』下巻(東京美術 一九六九年五月)、小林計一郎『善光寺さん』(銀河書房 一九七三年三月)、小林計一郎「善光寺縁起と女性」(『長野』第五十号 一九七三年七月)、牛山佳幸「善光寺創建と善光寺信仰の発展」(『善光寺 心とかたち』第一法規 一九九一年四月)、吉原浩人「善光寺縁起」における女人救済の諸相」(『国文学 解釈と鑑賞』第五六巻五号 一九九一年五月)、小林計一郎『善光寺史研究』(信濃毎日新聞社 二〇〇〇年五月)。

(8) 延慶本『平家物語』第二本に「又去三月廿四日、信乃善光寺炎上ノ由、其間ヘアリ。(中略)其後推古天皇ノ御宇ニ及テ、信乃国水内郡、稚麻統真人本太善光、是ヲ安置シ奉テヨリ以降五百八十歳、炎上ノ例、是ゾ初ト聞ヘシ」(北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』本文篇 上(勉誠出版 一九九〇年六月)とある。

(9) 『古今著聞集』(巻二 釈教第二 六二「鎌倉右大将善光寺如来の定印来迎印を拜する事」)に「鎌倉右大将上洛の時、天王寺へ参せられたりける。その時は鳥羽宮別当にてなんおはしける。御対面ありけるに幕下申されけるは、『頼朝が一期に不思議一度候き。善光寺仏礼し奉る事二度也。其内はじめは定印にておはしましき。次のたびは来迎の印にておはしまし候。すべて此仏、昔より印相さだまり給はぬよし申つたへて候へど、まさしく證をみたてまつりて候し』と申されけり。『彼幕下は、たゞ人にはあらざりける』とぞ、宮仰せられける」とあり、頼朝の善光寺参詣は二度あったように書かれている。また、『相良家文書』『立川寺年代記』『仮名年代記』『神皇正統録』では、建久八年(一一九七)三月の参詣を記し(『信濃史料』第三巻 建久八年三月二三日条)、『善光寺縁起集註』、『善光寺深秘録』では、同年六月二五日に参詣があったことを伝えている(前掲注(7)坂井衡平『善光寺史』下巻(東京美術 一九六九年五月)。

(10) 『信生法師日記』(新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』所収 一九九四年七月)には「善光寺より、二位殿の御風邪の御』とはすがたり」信濃善光寺参詣記事について

訪ひに参りて侍れば、いつしかはかなくならせ給ひぬるにぞ、有為無常の理り、これに驚くべきにあらねど、『秋必ず修行』と仰せられしと思ひ出でられて、まどひの涙一度昔の袂を潤して、乾き難し」とあり、政子はその薨去により善光寺参詣が叶わなかつたと記す。『吾妻鏡』によると、北条政子は嘉禄元年（一二二五）七月十一日に六九歳で薨去している。

(11) 金井清光「平家物語の義仲説話と善光寺聖」『文学』第四五卷第十号 一九七七年十一月。

(12) 吉原浩人「善光寺参り―とはすがたり』・道行き・参籠」『国文学 解釈と鑑賞』第七十卷第五号 二〇〇五年五月。

(13) 小林計一郎「善光寺と女性参詣―長野市箱清水―」『社会と伝承』第六卷第三号 一九六二年十月。

(14) 牛山佳幸氏は『とはすがたり』の例をあげ、当時善光寺内には修行する尼たちが多数居住しており、すでに尼院が存在していた可能性を示唆されている（『善光寺創建と善光寺信仰の発展』『善光寺 心とかたち』第一法規 一九九一年四月）。

(15) 前掲注（1）小口倫司氏の「二条の善光寺参詣について」『駒沢国文』第三号 一九六四年五月）では、作者二条の信濃善光寺否定説の理由の一つに同寺が鎌倉時代も著名な霊場で山岳道場的な面が濃く、高所に建てられた寺にも関わらず、作品に「眺望などはなけれど」と記していることをあげておられる。善光寺仁王門一帯は現在の本堂が建てられた江戸時代中期まで本堂があつたとされており、中世の善光寺は現在よりも南の高所に位置していたことは通説になっている。『とはすがたり』は作者二条が巻五最終記事の徳治三年（一二〇八）頃に作品をまとめ、ある構想の下に執筆したものと考えられている。そのため記事の取捨選択は当然の結果であるし、事実をそのまま書くことを主眼としたものではない。当該記事にもその態度が見られると考えている。

(16) 前掲注（7）金井清光『時衆文芸研究』「善光寺聖とその語り物」（風間書房 一九六七年十一月）。

(17) 長門本『平家物語』巻五でも同様の記述がある。「善光、如来を、をひたてまつりて、夜は、かたくにたてまいらせて、うちふして、ねいるかと思たれば、如来、善光を、をひ給ふ。よるひるくたり給ひければ、程なく下着給ひて」（麻原美子・名波弘彰編『長門本平家物語の総合研究』第一巻校注篇上（勉誠出版 一九九九年二月））。

(18) 吉原浩人「善光寺本尊と生身信仰」（別冊近代の美術『仏像を旅する「中央線」』至文堂 一九九〇年六月）に詳しい。

(19) 吉原浩人氏は善光寺の旅を、「生身如来前の参籠によって心の対話を行い、現世安穩・後世菩提を願い、自身があらためて別の人生を歩むための訣別の旅の一環」とされた。伏見御所で法皇と再会した二条が自ら旅の目的を語り、「なおも疑いを持つ法皇に、一生不犯の志を告げて、去っていった」ことと関連づけておられ、過去を断ち切るための旅と解釈されている(前掲注(12))「善光寺参り―『とはずがたり』・道行き・参籠」(『国文学 解釈と鑑賞』第七十巻第五号 二〇〇五年五月)。本論文とは見解を異にする。

(本学大学院特別研修者)

『とはずがたり』信濃善光寺参詣記事について